



## 霧と灯火の向こう側へ：久栖博季「貝殻航路」論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国語探究研究会 公開日: 2026-03-06 キーワード: 芥川賞, 釧路, 地方文学, 喪失, 断絶, 負い目, 記憶, 考古学, 削る, ネガティブ・ケイパビリティ 作成者: 佐野, 比呂己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000803">https://doi.org/10.32150/0002000803</a>

## 霧と灯火の向こう側へ——久栖博季「貝殻航路」論

佐野 比呂己

キーワード 芥川賞、釧路、地方文学、喪失、断絶、負い目、記憶、考古学、削る、ネガティブ・ケイ。パビリティ

### 一 凍てつく夜の審判と、それでも消えぬ灯火

#### ●二〇二六年一月十四日、釧路の夜

窓の外は、凍てつくような太平洋からの風が吹き荒れている。ここ釧路の冬は、物理的な寒さ以上に、ある種の静寂と重さを伴って人々の生活に沈殿する。二〇二六年一月十四日、この夜もまた、そのような重苦しい静けさに包まれていた。私は使い古したマグカップに注いだコーヒーの湯気を見つめていた。その湯気の向こう側に、かつて教室の窓辺で同じような灰色の空を見上げていた一人の少女の姿を重ね合わせていたからだ。

#### 第一七四回芥川龍之介賞選考会。

日本文学において最も権威ある新人賞の一つであるこの賞の行方は、単なる文学的なイベントを超え、候補者にとっては一人の書き手としての運命を静かに、しかし決定的に変えてしまうかもしれない時間である。私の教え子であり、いまや日本文学の最前線を走る作家となった久栖博季の「貝殻航路」が、その候補作として名を連ねていた。

結果は、午後七時になって届いた。

受賞作は、鳥山まことの「時の家」、および鳥山丑雄の「叫び」。

久栖博季の名は、そこにはなかった。

不思議なことに、私自身の心境はひどく穏やかだった。惜しかったという感情がないわけではない。彼女がこの作品に注ぎ込んだ魂の総量を知る者として、その

労苦が芥川賞という形ある榮譽で報われることを願わなかったと言えれば嘘になる。しかし、落選の報を聞いた瞬間に私の胸を満たしたのは、落胆ではなく、むしろ安堵にも似た、静かな確信であった。

なぜなら、「貝殻航路」という作品が到達した場所は、賞の有無によってその価値が揺らぐような低い平原ではないからだ。それは、選考委員たちの議論や東京の文壇の流行といったものすらも飲み込む、深く、冷たく、そして美しい北の海の底のような場所にある。彼女はそこで、誰にも真似できない筆致で、時代に埋もれた〈声〉を掘り起こしたのだ。

#### ●選奨としての評論

翌朝、地元の新聞やニュースサイトは、この結果を淡々と、しかし温かみを持って伝えていた。釧路市および道東地域においては、彼女のノミネート自体がすでに快挙であり、地元出身の新たな純文学作家の誕生として、その文学的達成を歓迎する声は日増しに高まっている。

私は、一人の教師として、そして彼女の作品の最も熱心な読者の一人として、ペンを執ることにした。これは、敗北の記録ではない。受賞を逃した作家への慰めの手紙でもない。これは、作家・久栖博季がいかにしてその独自の文学世界を切り拓き、現代日本文学において稀有な静謐な闘争者となったのかを一人の教え子の歩みとともにたどるための記録である。

彼女が描いた「貝殻航路」は、単なる地方文学ではない。それは、北海道という

この厳しい自然と歴史が重なり合う場所から、誰もが抱える痛みにも、静かに触れるような光ともとれる。本稿では、私の記憶の中に眠る彼女の姿を照らし合わせながら、その作品の深層に潜む霧の中の航路を浮かび上がらせたいと思う。

## 二 書くことの萌芽

### ●教室の片隅の観察者

時計の針を少し戻そう。久栖博季、一九八七年生まれ。北海道釧路湖陵高等学校を経て、弘前大学人文学部を卒業した彼女は、現在、病院事務の職に従事しながら執筆活動が続けている。この経歴の最初にある釧路湖陵高校こそが、私と彼女の接点である。

当時の彼女は、教室の中で決して目立つ存在ではなかった。休み時間に廊下で大声を上げて笑い合う生徒たちの輪からは少し距離を置き、いつも自分の席で、あるいは図書室の片隅で、静かに本を読んでいるような生徒だった。しかし、それは孤独というよりも、観察のための沈黙であったように思う。彼女の瞳は、常に何かしらの対象を捉えていた。窓の外を流れる雲、黒板消しから舞い上がるチョークの粉、友人の何気ない一言に含まれる棘。そうした微細な事象を彼女はことばという網で捕まえるための準備をしていたのだ。

今でも鮮明に覚えている彼女の才能を突きつけられた瞬間がある。それは、中島敦の「山月記」を扱ったときのことだ。私は生徒たちに、このあまりにも有名な作品を題材にして、新聞を作成するという課題を出した。

「李徴が虎になった理由の考察」や「友情の在り方」といった、いわば教科書的な問いに対し、多くの生徒は楽しみながら熱心に取り組み、工夫を凝らした新聞を提出してくれた。しかし、それらはどこまでも優等生の域を出るものではなかった。だが、久栖の新聞だけは、明らかに異質だったのである。

それは高校生の課題という枠組みを軽々と踏み越え、すでに一編の文学とし

ての強靱な意志を宿していた。その紙面を読み進めるうちに、私は彼女が日々の沈黙の奥底で、どれほど激しく、深い内面的な対話を積み重ねてきたのかを知った。教師としての立場を忘れ、ただ一人の読者として圧倒されたあの感覚は、今も色褪せることがない。彼女の表現は、すでに私の想像しうる枠をはるかに超えた場所にあつたのだ。

また、在学中に有島青少年文芸賞に応募し、佳作に入選したことも、彼女の才能を証明するエピソードの一つだ。その瑞々しい感性に触れた時、私は彼女が将来、ことばを武器にして生きていくことになるだろうという予感を抱いた。そしてその予感は、二十数年の時を経て、確信へと変わったのである。

### ●二重生活の美学

作家となった現在の彼女は、極めてストイックな二重生活を送っている。日中は病院の事務職員として働き、夜や早朝のわずかな時間を執筆に充てる。職場(病院)とプライベートを完全に分離することは、二重三重人格が加速させる要因となる。

この分離は、彼女の創作にとって、なくてはならない呼吸のようなものだ。

病院という場所は、生と死が日常的に交差し、肉体的な苦痛や現実的な事務処理が支配する空間である。そこでは、文学的な曖昧さや感傷は許されない。彼女はそのリアリズムの最前線に身を置き、社会人としての責務を果たしている。そして、その反動のようにして、彼女はことばの世界へと潜行する。

彼女はこの二つの世界を行き来することで、現実の重みに押しつぶされることなく、かといって現実から遊離することもなく、独自の視座を保ち続けている。

### ●削ることの苦闘

彼女の書き方を見ると、ある種の畏怖さえ感じる。

彼女は、物語をつくることを「あらゆる可能性を一つずつ排除していく作業」と定義している。多くの作家が書くことによって世界を拡張しようとするのに対し、彼女は削ることによって真実に到達しようとする。

「書いている時間よりも削っている時間の方が圧倒的に長い」

「執筆に集中しすぎるあまり、歯を食いしばって顎が痛くなる」

これらのことばからは、彼女にとつての執筆が、優雅な知的遊戯ではなく、身を削るような肉体労働であることが伝わってくる。

彼女は、まずノートに手書きで文章を書きつける。頭も心もぐちゃぐちゃに散らかった状態から、混沌を吐き出すようにして文字を埋めていく。そして、それをPCに入力する段階で、徹底的な推敲と削除が行われる。余分な形容詞、安易な感情表現、説明的な描写。それらを容赦なく削ぎ落とし、残った骨格だけを磨き上げる。

その姿勢は、まさに彫刻である。デビュー作「彫刻の感想」がそのタイトルがそのまま、彼女の姿勢を物語っているように、そのことばを積み上げるのではなく、ことばの中に埋もれている形を掘り出しているのだ。だからこそ、彼女の文章は、どれほど長くても冗長さを感じさせず、硬質な鉱物のような輝きを放っている。

### 三 霧の中の断絶と接続

#### ●不在の中心を巡る旋回

ページをめくる手が、ある箇所ですと止まった。ここからは、この物語が抱える深い淵をのぞき込んでみたい。

この作品は、一見すると失踪した夫を待つ妻というありきたりなモチーフに基づいているように見えるが、そのディテールには現代的な断絶と地図の上に引かれた冷たい線が、個人の心さえも引き裂いていく残酷な暗喩が張り巡らされており、極めて現代的かつ政治的な小説である。

物語は、ある地方都市（釧路市がモデルと推測される）において、オランダ船籍の豪華客船ウエステルダム号が入港するというラジオニュースから幕を開ける。

このオープニングは秀逸だ。ウエステルダム号は、外部からやってくる巨大な祝祭、グローバルな富と流動性の象徴である。街の人々はその入港に浮き足立ち、非日常の光景に目を奪われる。

しかし、主人公・風の生活は、その祝祭から決定的に切り離されている。彼女の世界を支配しているのは、外部からの到来ではなく、内部からの欠落である。

風の夫であるあめみやは、半年前に車で出かけたまま帰還していない。

あめみやは元来、アラスカなどへふらりと旅に出る気質を持つ音楽家であったが、今回の不在は異質である。彼は車ごと消えた。フェリーを使えば道外、あるいは国外へも行けるかもしれないという可能性が、風の探索を無限に拡散させ、同時に彼女をその場に縛り付けている。

物語は、風と、あめみやの妹である夕希音という二人の女性の道行を中心に展開する。夕希音は赤いハスラーという、風なら決して選ばないであろう派手な車を運転する。灰色の霧に包まれた釧路の街において、その赤色は、停滞する日常に対する彼女の生命力の主張であり、同時に兄へのコンプレックスと愛憎が入り混じった感情の代償行為として機能している。

#### ●貝殻島灯台のリアリズム

「貝殻航路」を秀作たらしめている最大の要因は、そこに登場する貝殻島とその灯台をめぐる描写の圧倒的なリアリズムと象徴性である。

根室の納沙布岬に立ったことがある人なら、その距離の近さにことばを失うはずだ。わずか三・七km。叫べば届くのではないかと思えるほど目の前にある島が、実効支配という冷徹な壁によって、果てしなく遠い異国としてそこにある。日本人が近づくことはできない。

「貝殻航路」で夕希音は、この島のアイヌ語名「カイカライ」について語る。「波の

上面低いもの」を意味するその名の通り、満潮になれば水没してしまうような小さな岩礁。それは、歴史の波間に沈降し、表面上は見えなくなってしまったアイヌの文化や記憶そのもののメタファーである。

久栖は、この灯台に起きた現実のできごとを驚くべき表現によってフィクションに取り込んだ。

史実として、貝殻島灯台は一九三六年に日本が建設したが、戦後はソ連(ロシア)の支配下に置かれ、長らく外壁が崩落した廃墟のような姿で放置されていた。しかし、二〇二三年八月、事態は急変する。ロシア側が突如として灯台の修復を行い、約九年ぶりに点灯させたのである。さらに、灯台にはロシア国旗とロシア正教会の十字架が掲げられた。

これは日本側から見れば、領土問題における政治的な示威行動であり、一方的な現状変更である。しかし久栖は、このニュースを単なる政治的な背景としてではなく、登場人物たちの内面と共振する単なるニュースの断片を登場人物たちの血の通った痛みへと変えてしまった。

「壊れても修理に行けないため、何十年も光っていない灯台」

それが突如として、他者の手によって、しかも政治的な意図を持って光り輝く。風たちは、その光を望遠鏡を通して見るしかない。

わずか三・七km先にありながら、決して手が届かない場所。修理することも、触れることもできず、ただ他者によって書き換えられていく風景を眺めることしかできない無力感。

この近くで遠い距離感こそが、失踪した夫・あめみやと風の関係性であり、また、失われたアイヌのアイデンティティと夕希音との関係性そのものである。

十字架と国旗が掲げられた灯台は、もはや希望の道しるべではない。それは、解決不能な歴史の断絶と二度と戻らない時間の残酷さを照らし出すのは、もう二度とつながることのできない絶望を照らし出す冷ややかな光だ。

あの灯台に掲げられた十字架を見たとき、風は何を想ったのだろうか。それは、祈りすらも他者に奪われた瞬間だったのではないか。そんな想像が胸を締め

付ける。

### ●塗りつぶされる大地

「貝殻航路」において、久栖の視線は海だけではなく、陸地にも厳しく注がれている。

物語のクライマックス近く、風と夕希音は動物園の観覧車に乗る。回転する観覧車は移動しているようでいて、決してどこにも行かない円環運動の象徴だ。その閉じた箱の中から、二人は眼下の風景を見下ろす。

そこに見えるのは、かつての原野や湿地帯を埋め尽くすソーラーパネルの群れである。

近年、釧路湿原周辺や道東地域では、広大な自然環境における大規模太陽光発電所(メガソーラー)の建設が相次ぎ、私たちが見慣れてきた、あの湿原の柔らかな輪郭が、冷たい黒い板で覆われていく。反対の声を上げる人々の祈りも虚しく、大地が沈黙していくような感覚を彼女は鋭く、そして静かにすくい取っている。

久栖は、この無機質なパネルの海を単なる環境問題としてではなく、土地の記憶の上書きとして描いている。

かつてアイヌの人々が暮らし、カムイ(神)が宿るとされた原野。それが今、経済合理性の名の下に、黒いパネルによって塗りつぶされていく。

沖には、ロシアによって十字架を立てられた灯台。陸には、資本によってパネルを敷き詰められた大地。

その間に挟まれた人間たちの魂の置き場所はどこにあるのか。過去(灯台)は歪められ、現在(大地)は覆い隠される。この徹底的な居場所のなさこそが、あめみやを失踪へと駆り立て、夕希音を苛立たせている根源的な要因である。

### ●「メノ」の呪縛とアイデンティティのゆらぎ

久栖博季という作家の核にあるのは、北海道という土地に対する複雑な帰属意識ではないか。彼女は自身の先祖を移民の末裔(和人)と強く認識しており、開拓民の末裔としての負い目や土地に対するよそよそしさを常に抱えている。

「北海道を故郷と無邪気に呼べない葛藤」

この感覚が、彼女の作品に安易な郷土愛を許さない緊張感を与えている。

「貝殻航路」では、この葛藤がアイヌというテーマを通じて表出する。

夕希音は、自身の生い立ちについて語る際、「あの女(メノコ)の子供」と呼ばれた記憶を吐露する。メノコはアイヌ語で女性を指すことばだが、和人が使用する場合、歴史的に強烈な差別的ニュアンスや軽蔑、あるいは性的対象化の意味を帯びてきた。

夕希音がこのことばを蔑称として、呪いのように記憶している点は極めて重要だ。彼女たちは、祖母に育てられ、アイヌとしての誇りや文化を十全に教えられる前に、周囲からの差別的な視線だけを継承してしまったサイレント・アイヌの苦悩を体現している。

兄・あめみやがアラスカへ向かう行動も、この文脈で読み解けば、失われた「北方の先住性」を自身のルーツである北海道ではなく、海の向こうの類似した風景に求めようとする逃避行であり、悲しい巡礼のようにも見える。

久栖は、彼らの苦悩を博物館の中に展示された過去のものとしてではなく、いま、隣にいる人々の痛みとして描く。彼女の考古学的な手法は、地層の下に埋もれた土器を掘り出すように私たちの心の奥底に眠っているはずの、しかし誰もが蓋をしてきた出自の痛みを静かに掘り起こしていくのだ。

#### 四 作家・久栖博季の全貌——静寂とユーモアの振幅

##### ●文体の変遷と成熟

一教師として、彼女の高校時代から現在までの文章を見続けてきた私にとって、その成熟ぶりを目の当たりにして、私は教師であることを忘れ、ただ一人の読者として圧倒された。

デビュー作「彫刻の感想」では、三人称を用いながらも、どこか語りすぎることへの恐れと戦っているような硬さがあった。

次作「ウミガメを砕く」では、一人称に挑戦し、ブラックアウトという極限状況下での身体的な衝動を熱量の高い文章で描き出した。ここでは、「文章の熱」が高く評価される一方で、「構成の散らかり」も指摘された。

そして今回の「貝殻航路」である。

ここにあるのは、熱狂でも硬直でもない。静寂である。

霧に包まれた釧路の風景描写は、徹底的に削ぎ落とされ、余白を活かした文体によって構築されている。読者は、行間から立ち上る湿気や波の音、そして登場人物たちの沈黙の声を聞くことができる。

緩急のある文体のリズムは、霧の中で目を凝らす行為そのものを読者に体感させる。安易に答えを出さず、わからないことをわからないままにしておく。それは、霧の中でじっと目を凝らし続けるような孤独でタフな行為だ。彼女は、その霧の深さを引き受けるだけの強さを手に入れたのだ。このネガティブ・ケイ・パビリティと呼ぶべき静かな強さを手に入れたことこそが、久栖博季が長い時間をかけてたどり着いた、一つの到達点なのだと感じる。

##### ●隠されたユーモア

一方で、私は彼女が持つもう一つの側面、すなわちユーモアについても触れておきたい。

重厚でシリアスな「貝殻航路」や「ウミガメを砕く」とは対照的に、同人誌『吟醸掌篇 vol.2』に寄稿された短編「うしをきりとる」では、彼女の軽妙でシニールな味わい、彼女の中に眠っていたはずのあのおかしみが、紙面からあふれ出している。

そこには、牛(ホルスタイン)を切り取るという奇妙な発想によって、独特ののんびりとした空気が流れている。彼女は、悲劇的なテーマだけでなく、日常の裂け目にある滑稽さや人間存在のおかしみを描く才能も持ち合わせているのだ。

あの静かだった彼女の中に、これほどまでに軽妙なリズムが隠されていたとは思えば、彼女が時折見せたあの小さな微笑みはこうした滑稽な世界を既に捉えていたのかもしれない。

今はまだ、そのユーモアは短編の中に隠されているが、将来的には、この軽みがシリアスな長編の中に統合され、より豊潤な文学世界が展開されることを私は明るい予感とともに楽しみに待っている。悲劇と喜劇は表裏一体であり、彼女の鋭い観察眼は、その両面を捉えているはずだからだ。

## 五 通過点としての芥川賞選考と未来への提言

### ●解決のなさこそが誠実さ

決定からここまで、私は何度もあの選考結果を反芻していた。

鳥山まこと「時の家」、鳥山丑雄「叫び」の受賞は、それぞれの作品が持つ現代的なテーマ性と文学的強度が評価された結果であろう。心より祝意を表したい。

では、なぜ「貝殻航路」は選ばれなかったのか。

選考委員の目には、物語の解決のなさか、もしかすると物足りなく映ったのかもしれない。だが、私はそうは思わない。失踪した夫は帰ってこない。灯台の光は奪われたままである。ソーラーパネルは増え続ける。凧と夕希音は、何かを劇的に解決するわけではなく、ただその喪失を確認し、ともに生きていくことを選ぶだけだ。

しかし、私は声を大にして言いたい。その解決のなさこそが、この作品の誠実さなのだ。

安易なハッピーエンドや政治的な解決を描くことは、このリアリティに対する裏切りになる。久栖は、解決不能な現実をそのままの重さで提示することを選んだ。それは文学的な冒険であり、勇氣ある決断である。今回の結果は、彼女の作家としての価値をいささかも損なうものではない。むしろ、芥川賞という巨大なレッテルを貼られることなく、もうしばらくの間、静かに自身の文学を深める時間を手に入れたとポジティブにとらえることもできる。

### ●霧の向こうの航路図

今回の芥川賞選考という一つの通過点を経て、「貝殻航路」という物語は、作者の手を離れ、読者一人ひとりの孤独な夜に寄り添う確かな光となった。ロシアの国旗が翻る貝殻島灯台、あるいは霧の向こうに消えた愛する者の面影。解決不能な現実をそのままの重さで提示したこの作品は、安易な救済を拒むことで、かつて読む者の内側に消えない航路を刻んでいる。

「書き言葉は私を自由にしてくれる」

かつて久栖が語ったその確信は、いまやこの北の大地から発信される新しい文学の鼓動として、広く世に響き始めている。霧を彫刻し、不在を書き込むその静謐な筆致が、今後どのような地平を切り拓いていくのか。一人の読者として、そしてこの土地の記憶をともしにする者として、次なる航路の誕生を霧の向こうに光を見出すような期待とともに待ち続けたい。

※ 本稿は、科研費25K06164の成果の一部である。

※ 本稿は、『国語速報』第二巻(国語探究研究会、令和八年(二〇二六)一月十八日受理)に掲載された論稿を一部修正し、再掲したものである。

(さ)の ひろみ／北海道教育大学教授・釧路校)